

環境変化への対応

Response to Changes in Market Environment

執行役員

山口 隆夫

Takao YAMAGUCHI



当社の中期ビジョンの柱であるVehicle-ICTへの変革のキーワードはくつながる＜システム＞への対応であるが、ここで重要なことは環境の変化に素早く対応しながら、その時代のユーザーニーズにタイムリに應える商品やサービスの提供である。

その一方で、時代の進化とともに情報やサービスも多様化し、その提供手段も大きく変貌してきた。その代表例がインターネットの普及であろう。

インターネットは1980年代後半アメリカで商用目的で一般化が始まり、1995年のWindows95の登場で一般に広がった。本格的な普及は2000年からで、ブロードバンド接続により低価格が進み現在に至っている。この間パソコン以外でもゲーム機・携帯電話・家電といった商品での対応が進み、合わせてサービスやコンテンツの拡充が大幅に図られ、普及に拍車をかけた。そしてここ数年で通信速度が飛躍的に向上したことでシームレスに車の中でも活用できる環境が整った。

重要なことは、パソコンやモバイル機器で楽しんだり日常的に有効活用しているサービスや情報をいかに車の運転状態を把握しながらドライバに負担をかけない形で提供するか（DSS：Driver Support System）ということである。

当社は車載機メーカーとして＜マルチメディア＞＜情報通信＞＜センシング＞＜車両制御＞の技術を保有している。これは他の競合メーカーと比較しても優位なポジションにあり、さらに富士通グループの保有する技術を有効に活用することでさらなるアドバンテージを発揮することが可能である。これからはこれらの保有技術を生かしながら、車室内外の情報やコンテンツをいかにうまく組み合わせてユーザにわかりやすくかつ使う喜びを提供することが重要となる。

話は少し過去に戻るが、かつてはオーディオ・AVN等に代表されるように各社それぞれが保有する技術にその時代のニーズを反映した

機能等を付加しながら商品化を進めてきた。いわゆるスタンド・アローン型商品開発である。

ところが、これまで述べてきた様にさまざまなリアルタイム情報やカスタマイズ可能な情報が車の中でも必要となってきた。これは車載機における静的情報から動的情報へのニーズの変化ではないだろうか？

音楽についてあてはめてみると、購入したCDを車載器で録音・再生するという機能の開発からインターネット上で日々アップデートされる音楽をストリーミング的に車の中で再生する機能の開発への変化であり、我々の技術開発にあてはめるとDECK開発から圧縮音楽データのデコード技術対応への変化ということになる。

以上のことをまとめてみると、各コンテンツプロバイダーが持つ多種／多様化するサービスや情報に対して通信等のインフラを活用して、さらには車載センサ等との連携をうまく図りながらさまざまなユーザーニーズに対応すべくカスタマイズ技術等を活用しながら使い分けるためのシステム構築力と何を当社のコア技術とするかの選択が今後の競争を勝ち抜く鍵と考える。

技術開発の視点からコア技術について述べると従来からの受信技術・音響技術・センサ技術・車両制御ECU技術はもちろん重要であるが、インフラや車両等の環境変化を素早くキャッチして世の中にあまたに存在するハード・ソフト技術の中から何を自社のコア技術として取り組み、何を他社と協力し、何を調達するか、という眼力がますます重要となる。

そのためには急激な環境変化また緩やかな環境変化をとらえながら、その時代時代のニーズとシーズの両輪を常に考えながらその変化にタイムリに対応できるかが会社力ではないだろうか。

山口隆夫